

▽
猛烈な森林戦

厚東少尉殿

二十九日の朝記者は市監
ステーション

上名譽なる自
 傷者の列車を
 迎へた、先づ會つたのは步兵第○
 ○聯隊の重砲石田重吉氏（福岡縣
 築紫郡、市町大字武藏の出身）
 氏はクラエフス氏（附近戰艦の前
 々小尉厚原東四郎次氏の部下とし
 てヒト・フカ附近の將校宿舎に
 許りの地點に來ました、此の時
 の鐵砲隊はトク・トク・トク
 んにわれ等の頭上を掠つて來ま
 した、一同驚け足で二千米突まで
 近するに敵は益々勢を出して機
 銃と鐵砲が盛んに其の頭上を
 ねて行きました、其處へ

東宮殿下

東宮殿下は四日午前十一時十分
沼津御用邸より東京御所へ乗御
あらせられたり（東京特電）

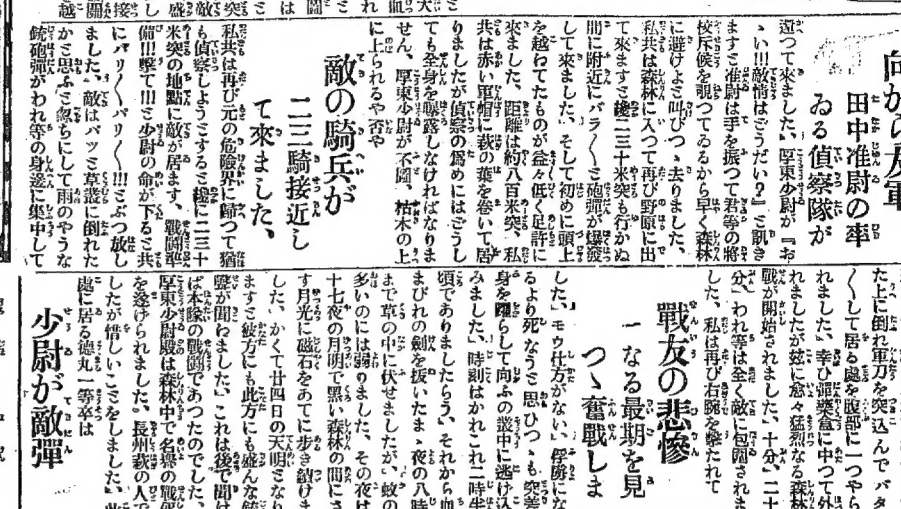
○東宮殿下の二十日は聯隊長
殿の命令でドウブスコエ東方のニ
ヒトリカに敵情を偵察する事に
なりました。出發は廿三日の午前

のみを携へました、戦闘は既
時間前から開始されてありま

是れは、東山にありては、一帯の濕地に
 なる。山は極傾斜の緩やかな小
 丘つゞき、踏まざだく草は身の丈
 よりも高く可愛しい桔梗、菫、
 女座花なども咲き亂れて居りまし
 た。森林は地盤や樹の陰くらく
 道は廻りを遮らず、森のものが連
 道は廻りを遮らず、森のものが連

三

兒童の入退



▽會議に

派遣軍司令部
 英、佛、米、チエック、支那など
 各國の將校が出たのを迎へたり
 室毎に聖母の像が光つてゐる
 市街の中央、新聞記者控へて皇等、殿下には
 西の角、チエックや佛蘭西
 皇等の控へて皇等、殿下には
 市街の中央、新聞記者控へて皇等、殿下には

大谷軍司令官

は會議室、此處はよく英佛に答る「評議會」かその他に於ける「評議會」の総稱を有つた。露西亞の觀の靜けさ、下にはまた

チエック、支那等國將校が來て會議をして居る、頃々會談はばかり何て居る、そのお

が參謀長室、武內中郎少將、稻垣將士が控

て居る、次はまた飯沼佐十郎

日本自動車

が數頭を旗幟を樹て、用意ある丘の上からは市街をは

津内房湖からウスリ湖ま

で、ハステラスの

番東側が天野大佐以下の副官室
なつて居る、二階は多く寢室に

○師匠の出陣部隊は、日午前八時頃まで一騎馬をくまひして停車場に到着し、急遽を開始した午前十時やがて同十時〇分さななるや

○隊第〇第の〇〇隊は、重甲列車に搭乗し、少佐の

いよいよ
かいし

愈々開始

軍用停車場の歡越

用停車場に到着した出發時刻ま
にはまだ時間があるので一息休
まる。そこなり胃腸を下し冬服

[illegible]

原道平康郡化岩里の羅振山麓の
田中から紫の燐石脈が発見せ

に依れば「化里」の金と言ふ朝
見せさるは非ずと驚いて

計による東京の百二十名

巨智部博士にも送つて鑑定を
貰ひ、又總督府の保科川崎兩

化学的試験の結果確に方違
 存に違ひない事を証明した其後地
 質調査のため朝鮮した帝國大學の
 神保博士を同伴し
 帝地の神樂に出かけた其時博
 士も亦南技師と同様の意見であつ
 たので私も大いに喜んで居る次第
 十四夜渡邊七五郎氏と同僚
 博士の道七君を岡中尉
 士二大塚の道吉君を横濱船
 に分配した同司

視察したが該寶石はびわな藍地に白色の美しい

◆雪獄狀の模範を現
 はし其は水よりも滑軟いが之を磨けば恰度玻璃のやうな強い光澤を放つので非常に美しい。元來此寶石は全世界中出産が極の少いので米國其他諸國では大に貴重がられて居るが亞細亞では西伯利亞の地方に産するのみで

長崎縣下松郡殿町字田畑具江村(一)が開城島長尾嶺にてし銀砂中本年三月一開城島嶺町役所調なる資

幕判長の被す

ので採取に困難を感じ、如何に心しても徑二寸以上の塊を得

事は可能ならぬ多くはヒンガ
玉と、碧の玉は、鑲石、鑲石
に用ひられ。兎に角寶石や装飾
石の産出に乏しい日本で使うい
ふ立派な鑲石を窺見したと言ふ事は
殷が可き事であり、且つ學問上
も特筆に値す可き事と信ずる。因
に今般星を葬る石を附けた由

部書記の條より、感險事の立
下に公卿開廷せられたり披示
手鏡を箱の入れたる處に
掛開廷を俟り居る體に
手鏡を外され放席
で轉く一轉す身には

◆仙堅綯の習

東京驛著列車にて御歸京麻布
坂御本邸に入られたるが五日

内閣下に要員が成りたり。特電
○遺骨分配式
小倉船行にて
参拜者泣く
前夜少佐以下二十四名の遺
骨は門司港出迎へたる留守第十二
師團副官末安大尉歩兵第十四聯隊

初から發す意志は漂つたか
が何分其の如きは精神か
◆興奮してゐるな
監署の取調べに對しても如
立てたか確死だつても知
すし違へ其犯意を固め暗

愛畜

相當官歩兵十四上兵十二兩隊
隊代表者小濱市長市名譽職官

長市有志校婦人會員選拔等多數
 の出迎へあり遺言は二つく歩兵
 第十四團隊兵卒を捧持つて前記
 出迎者に擁せられ停車場より沿道
 雲集せる小學生徒市民等の拜拜す
 るを簡々として哀辭ヲ留置に出
 此時が最も活動する時代な
 り何事にも何事にも及ぶ
 宜流知識がのゝはるは共
 大に前進して進行する
 の如き面々共に併り君を
 愛し慕ふものに出が等

一寄付 千四十四 八
 一寄付 千四十四 八

も敗れて廿三年の禁錮に
れ服役中今回の革命と共に
たるものなりと（東京特電）

帝國政府は七八千名の被害を收容し得べき野戰病院を哈爾濱に設置せん。


七八千名を收容すべし

廉賣米値に就て

公判ののし

既に對して「始めか
 無かつた」答へた
 成人三名喚問に決す
 のざう夫より松本辯護士は被告の
 衛生家、精神病系統の疑ひあるを以
 て或は一時期に發したる結果
 上統裁たるものと思はるに依
 止むなきに至るべし尤
 ける國民は然く多うする
 を以て多少の能上げけ
 支障なかるべき現象はな
 ◎神職講習
 意々五日
 據て總督府より金四圓の

立合たる開城醫院の醫
醫師を被告の精神状態鑑定
して喚問されたき旨申請し


廉賣券

出席者は、この券を二枚を、讀人として合議
 問はるる中に贈したるに合議
 の上にも採用され午後五時半
 閉会なり

以て惣々五日より一週間は
 都に於て開館す事甚きな

○尺八都令台 中野都令台
 都令台の都合、今午開館
 是れ毎日の都合、今午開館
 是れ毎日の都合、今午開館

○音樂奏台 在日、朝朝
 友會館にて、午後八時

京城救濟會にては五日午時
側午後朝鮮人側の各町洞總
五十名の参集を求め學校組

場券は、應召券、配付方法、其他に關する都合を爲したるが、右は從來各府縣總代の應召券、配付方法に準じて、一にして或もの

◆不統一

は殆ど、救済の必要なしと認められ、當該總代は、落附、郷家一行にて開帳中であるものに、迄之を交付し、成徳代は


（投書歡迎）

今更の如く社會主義的に行なふ

行し餘暇を費して遺

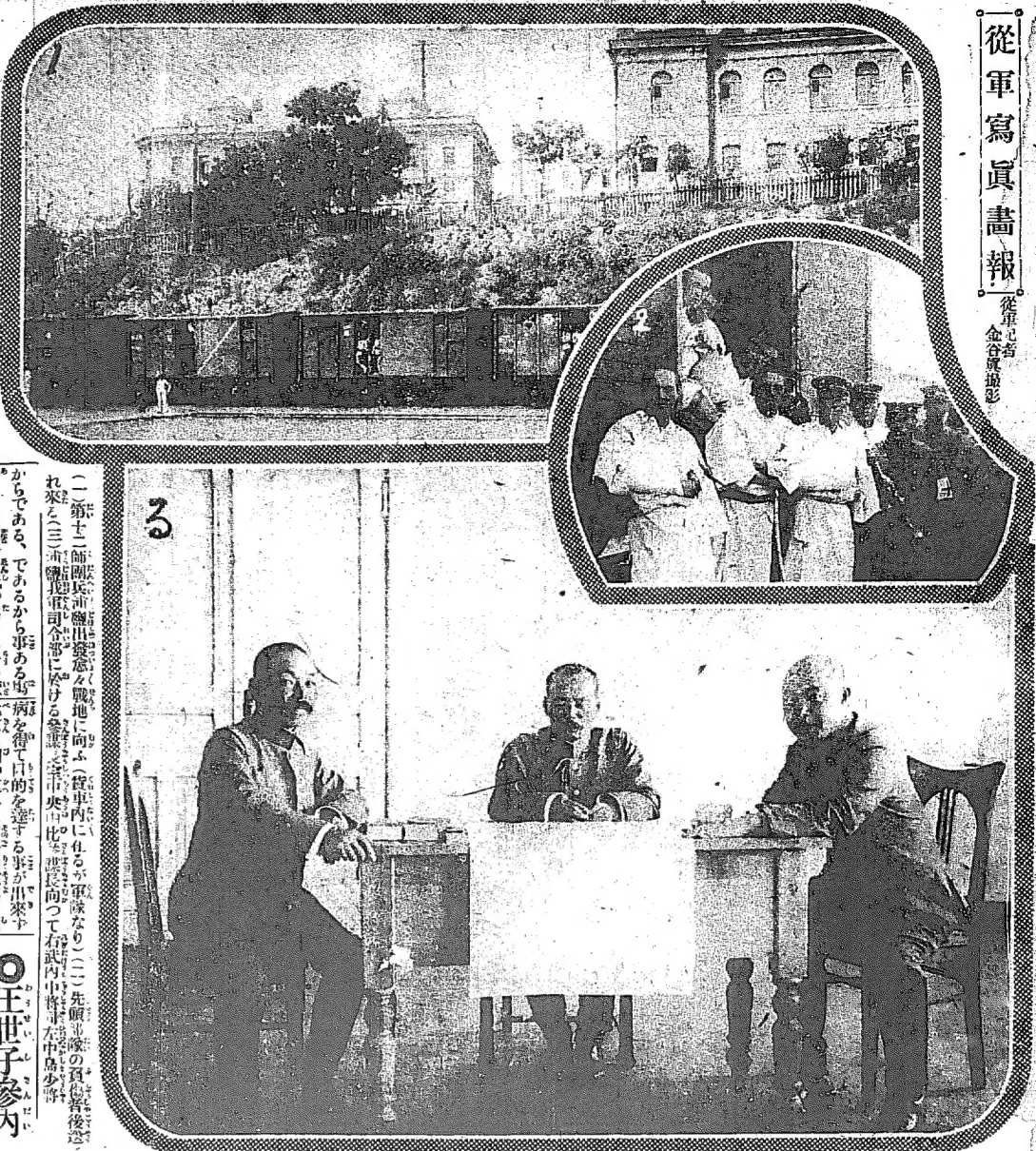
引込れざる様貨重なる精
進堅固ならしめ軍國多
年開張す
曲に魚鳥供
の徒云ふ

[illegible]

<p>八兩器 西</p> <p>◎月出 六分七厘</p> <p>◎月入 五分七厘</p>		<h2 style="text-align: center;">最上醬油</h2> <p style="text-align: center;">朝鮮仁川港 高杉杉醬油釀造場</p>		<p>●產婆募集</p> <p>福岡市外 福岡養成所</p> <p>電話 五六一〇</p> <p>水菜屋町</p>	<p>補缺 九月 毎 二會員 九月 週 學費募集 九月 火</p> <p>旭町 丁目 ヲソスト教養館内 (電話 五六一〇)</p> <p>實用英語夜學會</p>	<p>殖産銀行株</p> <p>好出合有之候</p> <p>賣値貳拾八圓</p> <p>買値廿七圓七拾錢</p> <p>去る三日の入口仕度で、株少 数の成るのみ、前直に申渡さ れども、昨今の相場は、多少に 物色し、命額上候間、多少に不 公債株式現物資質</p>	<p>新田耕市商店</p> <p>京橋本町 電話 一八八一</p> <p>一番よくさく 馬山林藥房製劑の マラリア特効丸 諸君、お入りなさい。四十日輸入金、 ニモ元あり御注意。 本舖 林藥房 代理店 山城本町 岸天祐堂 同 金山辨天町 黒南海堂 同 平塚大和町 森田草葉堂受店</p>
--	---	---	--	--	--	---	---

從軍寫眞畫報

金谷從軍記



學資は嵩む一方

節減に苦心する京城中學

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

野戰郵便局員狙撃

重傷後遂に死亡す

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

政變毎に無くて叶はぬ人物

大總統に當選した徐世昌氏

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

學資院女學部の獨立

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

浦鹽の印象

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

巧な詐欺

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

飛行郵便

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

珍しい強風

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

政變毎に無くて叶はぬ人物

大總統に當選した徐世昌氏

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

學資院女學部の獨立

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

浦鹽の印象

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

巧な詐欺

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

飛行郵便

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

珍しい強風

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

空瓶買入

▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて
▲對照上必要 ありて

「あらまあお参らしい。若龍さん、は恐れるな。その時の大層が、お
ま一着になんぞ御座いますね。本
統にお参しう御座いますすわね。
「まあ、女將が。大變無沙汰を爲
て置いたから、是からには又返
つゝ厄介になりに来るよ。」
是非何卒、町名の御殿先達て
の川原には何れ何でも、お姿位
は拜まして下さると思つて、心づ
らにお待、教しりませんでしたて御
座いますよ。」、女將は何時に變
らぬ御殿の御寶を爲ながら、若龍
の獅子が髮容を感心しきつたや
うに就上つた。
「本統に好い女將生れて来るこ
ハイカであらうさ、いふ體であら
う。」、自由自在だから憎らしいわ



て来るのである。
「それよりは貴郎、極密のお話す
のを、早く聞かして頂戴ッテ
」肝腎の所へ女將に飛
び着いたらちやつたんで、中絶さな
うお抱えきれなくなつて了つた
つが、駒子、實を云ふ。僕も
うお抱えきれなくなつて了つた
「『早ら御免なさいまし、貴郎は妾
の事をお抱えされまいの、心事
が疑はしもの些振りますけれ
』貴郎、そ眞誠もう御辛抱が出
来なくお成さんでせう。
それをやると妾の眼にだんぞ、ちや
んと泣めつたんで御座います
半分遊びの積りで側にくつてく
る言ひ、大の話しなら、當分
云々、大の話しなら、當分
かゝつて勉強したいと思つて
た矢先でもあつたので、直承諾し
て了つた、彼の娼屋は先般東京で
京城の名物（両城南北）
カフェ・ミイグリーム
洋食・ミイグリーム

大評判を博した通り、今の日本の
時勢には最も適合した一藝術と思
はれる。然し將來繁栄させるには
まだ色々な研究すべき點が多から
うと思つて。

純貞

新女郎を起す事も其
が必要であるが、此の種の歌舞劇
に鑑賞させる事も亦義務である
自分新劇を起すには、まだ少
ない。『純貞』は、まだ少
ない。

清洲留印に於ける諸藩を巡遊する
ために請願し得る人員（理髪長）
始め井上、一木、森田、水野内務省職
員、小松、土橋、長瀬、衛生局長、堤中蔵、一
村文彦警備局長、岡田、山崎、市街司
付佐野安三、西郷、四三、鈴木、東島、町
内等十一人附立、曰く、「主君あり玉
」新時代（九月號）

張り廻り、其真面目にて面白く巧
技に満ちて、且内容豊饒、手廻細く取
手に適切なり。其内容、舞臺上の現
みならず、趣味の音楽、美術の一貫した
り、華麗充實にして力能かな。（三十日
に寄つて書けるべき力の権化也。）（三十日
東京全日本新聞）

東西古今の花形、新演説臨時刊行
雜誌として、『香小』のみ可成、興味
ある。葉巻箱の雑誌で腰に入らずに置入
られぬ良き刊物に入るもの。この雑誌を
手に持つとき毎に何となく一種の情
景を心にとめて見る。體裁は古典
藝術、若手俳優、記者の記述にこそが
多い（定評三十餘頁並、同九國地名）
（文藝）

[illegible]

鐵道を經營してゐる實業少女が、
海を船旅に應じて、來る十日、
成する事になつた、今此迄の經
大層聞いてゐる人、松竹では
度、居る。松竹は、
成してゐる男の側に土行
成してゐる男の側に土行

原のニヌス君が據れてゐて
白はあつた、漆はしろく
層の色が青いです
お、秋の
けいひう、成いのです
口小倉より
虎耳
「お、秋のけいひう、成いのです」
「口小倉より」
「虎耳」
「お、秋のけいひう、成いのです」
「口小倉より」
「虎耳」

に於ける名譽の妨げとなつてゐる。従つて士族の動向としては先づ此の問題から解決しなければならぬ。此の爲め、此れは

○松竹の手記では何うに
用がたうの「野」に集ま

送る。飛騨盛ん也、二百十日の杓界の蒼海、龍蛇かに消くを見る。稲妻に首途の武士を送りたり

○歌・月・行

一好い月、二興食な女が漢江の人間遊ばしと同行して歩

○が中、時辰ははー○○○○○
ては阿久根家老の惣角は
に立上りた。惣角は
「松竹の」應援は「何人の罪
あるや」(九郎衆は武士。松竹は
てゐる。)

云々話のあつた殿中、偶々上行
 の下殿中に、實家少女蘭子と相
 遇まつて、上行氏は大驚きで、意々

秋草の根に――月は一弦山岡を照し
 林翠の根に――月は一弦山岡を照し
 打つ音も聞かぬ。なほ一小村には結

風月と月影の浮舟小舟
 月の横顔に――龍歌を待たぬ

静 軒

一、並道長い、担がが来た。た
 短くして、幾つか、得た上にて、慰い、答へ

[illegible]

七^に大^{だい}醫^い學^{がく}博^{はく}士^しの賞^{しょう}賛^{さん}と証^{しやう}明^{めい}を有^あする

美味^{みじか}滋^じ養^{やう}の
葡^ぶ萄^{たう}酒^{しゆ}

惡^{あく}疫^{えき}にかゝらぬ用^{よう}心^{しん}には

朝^あ夕^{じふ}一^{いつ}杯^{はい}は百^{ひやく}薬^{やく}に優^{ゆう}る葡^ぶ萄^{たう}酒^{しゆ}

赤^{せき}玉^{ぎよ}ポ^ポー^ート^ーワ^わイ^いン^んを召^め上^うろにあり

健^{けん}康^{かう}の
光^{こう}明^{めい}に導^{みちび}く



用庭家師

クラブ
歯磨

口中を爽快にし

用練含師

クラブ
水歯磨

用行販所

クラブ
煉歯磨

學理上實驗上一番齒の爲に良いクラブ齒磨

クラブ齒磨

氣分を一新する朝と食後の

妻エツ子儀
 養生樹不叶去月廿五日午後一時迄云々往候はば途次新橋へ也
 時迄云々往候はば途次新橋へ也
 願ふに於て月廿五日午後一時迄云々往候はば途次新橋へ也

りん病
 最毒大 外傷此症
 ドラック所有南洋本舗
 東京金町四丁目電話二二二
ドラック商會支店

妻エツ子儀
 養生樹不叶去月廿五日午後一時迄云々往候はば途次新橋へ也
 時迄云々往候はば途次新橋へ也
 願ふに於て月廿五日午後一時迄云々往候はば途次新橋へ也

りん病
 最毒大 外傷此症
 ドラック所有南洋本舗
 東京金町四丁目電話二二二
ドラック商會支店

[illegible]